

集いの場づくり半世紀

体の不自由な子支援、静岡「ねむの木学園」

体が不自由な子どもたちのための養護施設として、女優宮城まり子さん(91)が日本で初めて設立した「ねむの木学園」(静岡県掛川市)が6日に50周年を迎える。売名行為との批判を乗り越え、半世紀にわたり子どもたちに寄り添い続けた宮城さん。「健康な人も、そうでない人も集まれる場所をつくりたい」と今も夢を追い続けている。



卒業式で宮城まり子さんの車いすを押す「ねむの木学園」の子どもたち(静岡県掛川市)

91歳宮城さん 今も夢追う

桜の咲く山道を車で抜けると、赤い屋根と白壁の建物が見えた。現在、身体障害や知的障害のある478歳の男女73人が施設で暮らす「ねむの木村」だ。村には美術館や障害者施設「ねむの木学園」と、特別支援学校があり、うち33人が学校に通う。

楽譜を持った女の子が、職員との演奏に合わせ体を大きく揺らす。「字は読めなくてもね、楽譜は読めるの。不思議よね」。国語や算数といった授業もあるが、学園では音楽や絵画など感性を養う教育に力を注ぐ。

きっかけは1960年、脳性まひの子役を演じたことだった。障害児に対する教育の場が整備されていないことを知り、悲しさと怒りでいっぱいになった。「この子どもたちに楽しい勉強をさせてあげたい」。土地を探し、資金を調達するなど奔走した。「売名行為」と周囲は冷笑したが、めげなかった。

障害者への偏見が強く、旧優生保護法下で障害者へ

の不妊手術が行われていた時代。児童福祉や障害者福祉に関する法律が整っておらず、厚生省(当時)や静岡県に働き掛け、特例で設立が認められた。68年、同県浜岡町(現御前崎市)に「養護施設ねむの木学園」を開設。97年に掛川市へ移転した。

この50年、「何もしてあげられていないのでは」と無力さを感じるたびに運営から手を引こうと思った。でも、できなかった。「子どもたちが私を愛して、私も子どもたちを愛しちゃうから」。学園では「母ちゃん、母ちゃん」と子どもが宮城さんを向いていた。

障害児教育に大きな影響

清水寛・埼玉大名養教授(障害児教育)の話 ねむの木学園が設立された当時、体が不自由で歩いて学校に通えない子どもは、当然のように行政から就学免除され、家に閉じこもるしかなかった。制度がない中、こうした子どもたちの場をつくり上げたことは、先駆的で画期的。その後の障害児教育に与えた影響は大きい。また、絵画や音楽など表現活動を尊重した授業は、自分を表現することを通して自由を獲得するという意味において、教育の神髄だといえる。